

D-11 わが国における明治期以後の育児書の変遷

日本女大家政 〇加藤翠

目的 核家族化がすすみ、育児方法の变化のはげしい今日、育児書の普及と需要は過去のどの時代にも増して高まって来ているといえよう。しかし育児書のわが国における移り変わりについては、あまり明らかになっていない。育児書のこれからのあり方を考える上で、明治以来の育児書の変遷の美態を調べてみるので、これについて報告する。

方法 出版数等については、昭和4年以降分については出版年鑑を、それ以前分については国立国会図書館の明治期刊行図書目録とカート目録を参照した。

結果 育児書の判定はふつふしが、今回は教科書的なものや栄養育見の一方野の記述にとまわっているものを除き、両親を対象として育見の総合領域の指導を記述した書物を調べたところ、明治・大正そして昭和48年末までの約700冊余の育児書が出版されているようであった。年代を10年間隔に区切って見た場合、昭和35年より44年までの10年間は277冊の発行数を数え、ここをピークとしてそれ以後はやや低下の傾向がうかがえた。教科書育見書の出版は時代によってかなり片寄りがみられ、その時代の出版総数に対して教科書の割合の最も多かったのは、明治のはじめの頃であって、14冊中11冊が教科書育見書であった。

いふまでもなく育児書の指導内容その他は、この期間に様々な変遷をとけていた。